

DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

オナホ
ウンコキ♥

フルカラーCG集

基本 12枚

お漏らし好きの痴女と
スカトロ変態プレイ

※スカトロ表現閲覧注意

アナル中出し♥

この物語はフィクションです。
登場する人物・名称は架空であり
実在のものとは一切関係ございません。

ご注意

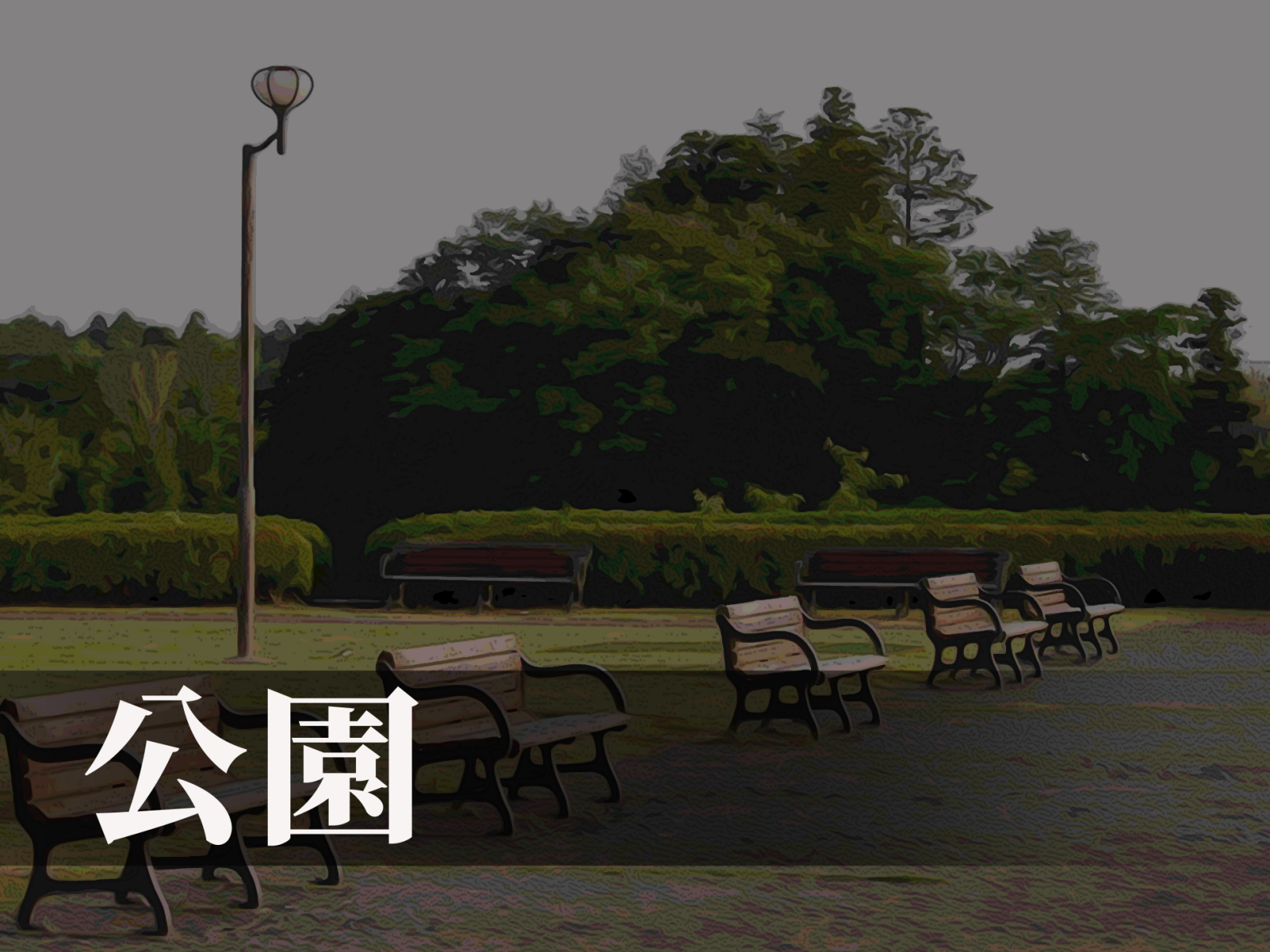
この作品の内容は、スカトロプレイを重視した
ものになっております。スカトロ耐性の無い方は
ご覧にならないようご注意ください。



Day.1

お漏らし好きの

変態痴女との出会い



公園




とある休日。
いつも通りの日曜日。

俺はお気に入りの公園に来ていた。

郊外ということもあって
いつも人が殆どいない……。
だが俺にとってはその方がいい。

運動不足解消のために
こうしてたまに

この場所に来るようになっている。



少し歩き疲れた俺は
公園の隅の方のベンチに腰掛ける。

そよ風が心地いい…。
そうして一息ついたら…。

「んっ……♡ふうう……っ」

急に人の気配を感じ、少し驚いた……。
不意に背後の方から
人の声が聞こえたような気がする。

女の声……？

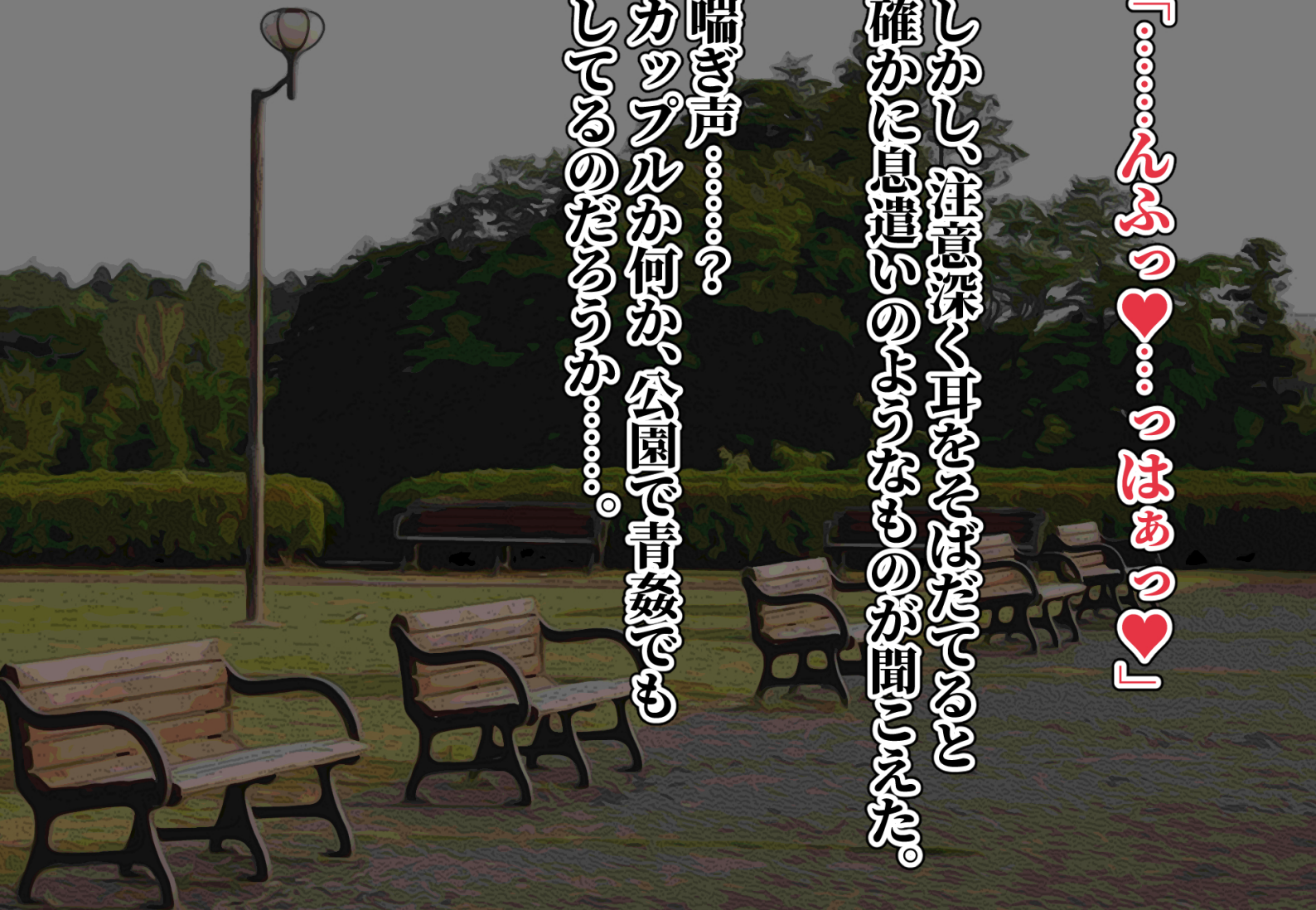
ふり返って確認するが、
人の姿はなく茂みがあるだけだ。

「……んふっ♡……っはあっ♡」

しかし、注意深く耳をそばだてると
確かに息遣いのようなものが聞こえた。

喘ぎ声……？

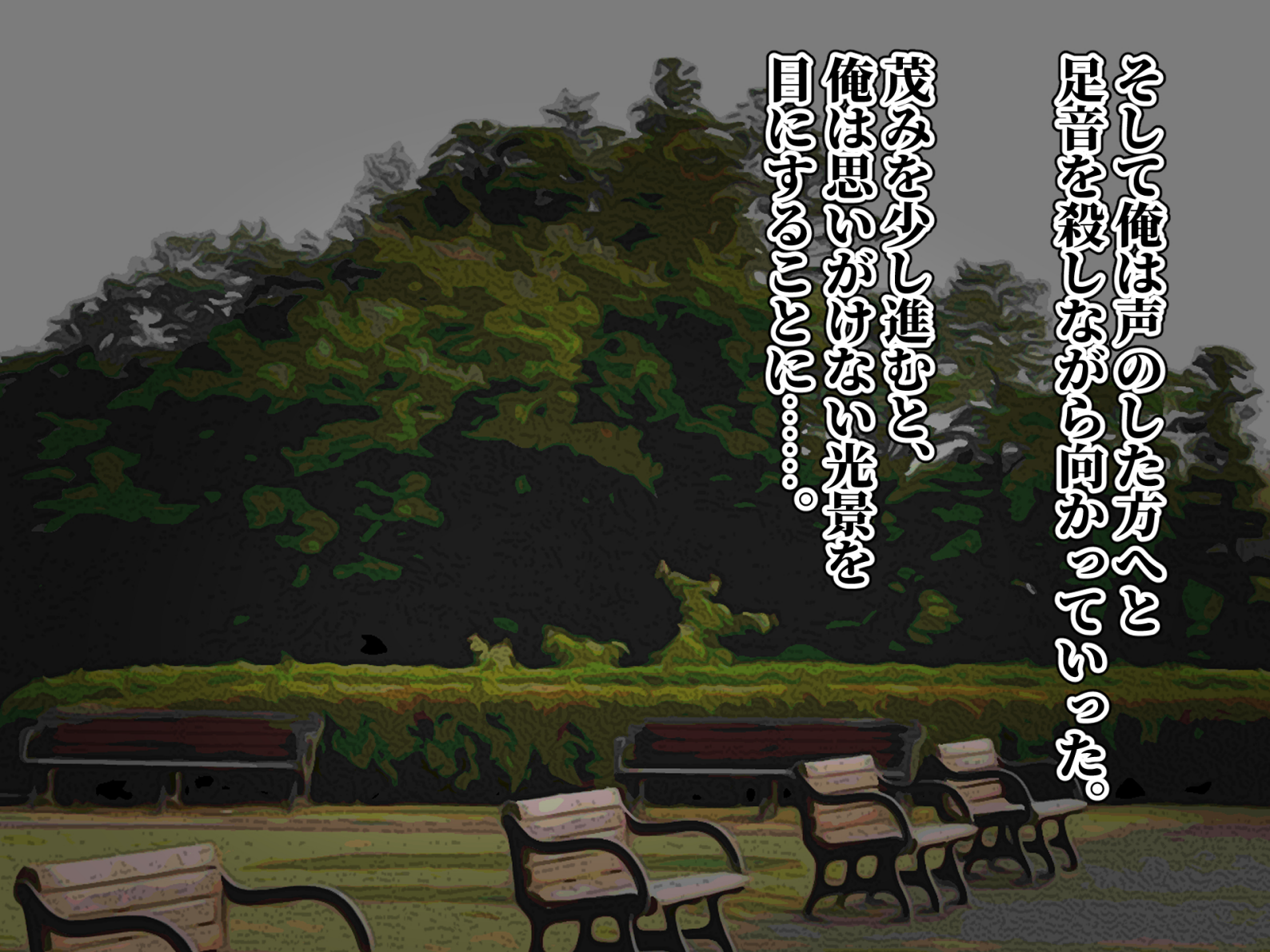
カップルか何か、公園で青姦でも
してるのだからか……。



気に食わないが、少し気になる。
少し覗いてやるうか……。

本当にやっていたら
今夜のオカズにでもしてやるう。

……変なことを考えたせいかな
なんだかムラムラしてきたぞ。

A park scene with a large, dense green tree in the background. In the foreground, there are several wooden benches with dark metal frames. The ground is a mix of grass and paved areas. The overall atmosphere is quiet and somewhat somber.

そして俺は声のした方へと
足音を殺しながら向かっていった。

茂みを少し進むと、
俺は思いがけない光景を
目にするのだ……。



思わず出そうになつた声を抑える。

茂みの影から人影を感じ、
その場で足を止めて目を凝らす…。

ガサッ

何をしているんだ…？

女の人が一人で下着も付けずに
しゃがみこんでいるぞ…。

息をするのも忘れて
俺はその光景に見入っていた……。

「お外で出しちゃう……♡フフ……」

はぁ

はぁ

「んんっ……出るぅ……♡」



「くふっ……で、出てきたっ……♡」

女が力むとアナルから
うんちが顔を出し始める……。

んんん

汗汗

「おっきいの、来そう……♡フフ……」

まさかと思っただが…。
この女、野外で脱糞する変態のようだ…。

はあ、

はあ、

ぐわんぐわん…

そしてこのアブノーマルな状況を
興奮している俺がいる…。

「んんっ……♡
（ミチミチ音が出ちやってる……♡）」

んんん

ミチッ
ミチッ

彼女が力むたび、
背徳的な音を立てながら
うんちが出てくる……。



「んぐう……っ♡
はあああああっ♡♡」



「はぁ……はぁ……♡
太いの出たあ……♡」

……一部始終を見てしまった。
他人の排便を初めて見たからか、
痛くなるほど勃起してしまっていた。

ボム

ビク… ビク…

いりまじりもこじりもはるるん
見つかってしまいかもしれない……。

まだ見ていたいたい気持ちもあるが
そろそろ離れようか。
そして立ち去るうとした時……。

毛……

「だだ、誰かいるんですかっ…!!」

しまった。

長い杖を服にひっかけて
大きな音を立ててしまった……。

ガッガッ

観念して彼女の前に姿を出す。
かなり驚いているようだったの
で正直に覗いていたことを伝える。

「どどこから見てもたんですかあ……」

あわわわ

あわわ

ホカ

ホカ

「は、始めから……
目が離せなくて……」

彼女の視線がふと股間に注がれる。
勃起しているのに気付き
なんとなく状況を掴めたようだ。

「フフ……おにいさんも
好きなんですわね？こっぴつこっぴつ……♡」

「ははは……」

モクモク……

「うんちするトコみて勃起するなんて
へ、変態さんなんですわねえ…フフフ♥」

緊張して少し声が震えているようだが
どうやら好意(?)を向けられているようだ。

「ギンギンですね…♥
思いつきりテント張ってますよお…。」



急に距離を詰められ、股間を擦られる。

「こんなにおつきくなつて…
つらいですよねえ…♡」

彼女とうんちのにおいを嗅ぎつづけて
俺の勃起は収まる気配はなかった。

はあ♡
はあ♡

「わたし…お外でうんちして…
ちよっとムラムラしてるんですよ」

「ここでスツキリ出しちゃえば…
おにいさんも、私も、
良いこと尽くしですよね…♡」

「えへへ…」



まさか女の脱糞を覗いて
誘われることになるとは…。

だが俺の股間は正直に
己の性欲をこれでもかと主張している。

「と、止めないってことは
いいってことですよね……♡」

どうやら彼女の頭の中では
合意とみなされたようだ……。

多少、狼狽えながらも頷く。

「じゃあ、ズボンのチャック
下ろしちゃいますねえ……♡」



「わあ……♡
ほんとにギンギンですよ…フフ♡

触ってないのに熱気と匂いが
伝わってきてます…♡」

彼女の荒い吐息が少しくすぐったい…

ボム

ボム

充滿する雌のフェロモンと
うんちの匂いで我慢汁が溢れてきた…。

「フフフフ……それじゃあ……
いただきます……♡」

ムフア…

ムフ♡

ムフ♡



「……S!!」

んんん

あや♡

あや♡

亀頭に小さなキス。
軽い刺激なのに
なんて官能的なんだ……。



「どぶツ…んフツ…ふっ…♡」

思っていた以上の速度で
亀頭が頬肉で刺激される……。

んっ♡

「ぐぽッ…はあ…はあ…
き、気持ちいいですかあ？♥

私…変態だからあ……

いつもオナニーするとき
ディルド舐めてるから
結構、自信…あるんですよお…♥」

はあ

はあ

ビクッ

ビクッ

確かに凄かった…
あのまま続けられたら
イってたかもしれない……。

「えいっ♡」

彼女が胸元のスリットから
はち切れそうなおっぱいを露出させる。

「あ、暑くなってきたので
脱いじゃいましたあ…えへへっ♡」

はあはあ
はあはあ

「はむっ…♡」

再び啜え込まれ、快感に包まれる。

「んっ…♡ぐむっ…ぐぼっ…
（どんどん我慢汁が出てくるっ♡
濃厚な匂い…♡）」

はむっ

はむっ

激しい口内ピストンに
射精感がどんどん高められてく...。

「んぶっ...♡ぐぷっ...んっ...♡
ここわばって...もう亀頭がパンパンっ
そろそろ射精が近そう...♡」

びゅんっ...



んぶっ

んぶっ

ああっ…いくっ…!!

んぶっ

喉奥で思い切り出してやった。。。

彼女も鼻で荒く息をして
恍惚の表情を浮かべている……。

「フウーっ♡フウーっ♡

（はあはあ…っ♡初対面の人に

思い切りザーメン

喉奥に叩きつけられちゃったっ♡）」

んふーっ♡

んふーっ♡

んふーっ♡

んふーっ♡

んふーっ♡

「はあはあ…♡
勢いでやっちやいましたね…えへへ」

回から溢れた精液も手ですくって
すべて飲み干された。
けっころエロい…。



じゃーん

一息ついて、お互いはだけた服を直す。
すぐに離れるのもなんなので
少し話すことになった。

「あ、貴方もこういうの
好きなんですねえ…」

私がうんちしてるところを見て、
ぼ、勃起するなんて…♡」

えへへへ

「動画でそういうの見たことがあって。
実際目の前にすると…
匂いとシチュエーションに興奮して…。」

と、自身の趣味趣向について軽く話した。

「やっぱりそ、そうなんですわねえ！♥
私も好きなんですけど、
理解のある男性に全然出会えなくて……。」

そうだったのか。



その後、彼女は脱糞に目覚めた経緯を
話してくれた。

話すのは慣れて無さそうではあるが、
自分のことを話すのは好きみたいだ。



「あれは私が○学生の話です…。」

いつものように、
お外で遊んでいて……。」

「急にお腹が痛くなっちゃってしまっ
て、近くにトイレもなくて、」

「おなかをおさえてその場に
しゃがみ込んでしまったんです…」

「そうしたらその場にいた
男子と女子が集まってきた…」



「ねえねえ、どうしたのー?」

「おなか痛いのか?」

最初は仲のよかった友達が
心配してくれたんです。

うる...

うっ...

ぽんぽんぽんぽん...

「おい、なんか匂わねー?」

ガクブル...

その時、私、尿意も便意も限界で…
…みんなの前で出しちゃったんです。

「うわっママがよー!」

「うううううう……」

「えっ…」

「ホントに漏らしちゃったの?」

ビク
クワ
コロ
コロ



ふとももの周りが
じんわり温かくなってる

おしりっつ

止めたくても止まらなくて.....

ぐん

んんん

千の口...

でも、限界まで我慢していた尿意の
解放感の快感がすごくて...
頭の中が真の自になったんです.....

そして気が付くと
うんちまで漏らしちゃったんだ...。

お尻の音が匂うわ...。

お尻の音、匂うわ...。

男子の何人かが勃起していて…
そのとき初めて性の対象として
見られたことを自覚して…

……興奮しちゃったんです♡

泣いてうんちとど
おしっこを漏らしながら
感じていたんです、変態ですよね…♡

グワッ…

クワッ…



「こうしてお漏らしに
目覚めちゃったんです、私♥

そのあとは引越して
あの環境から離れたんですけど…



どうしてもあの経験が忘れられなくて
こうして脱糞することが
私の趣味なんです…ふふ…」

「長々と私の話を聞いていただいて
ありがとうございます…♡」

あと、
さ、最後にお願ひがあるんですけど…」



「また、私と会ってもらえませんか？
やっぱりこういう趣味に
理解のある男性が全然居なくて…」

Day.1

お漏らし好きの

変態痴女との出会い

END




Day.2

濃密! スカトロ
変態プレイ♡



ホテル





とある休日。
いつものとは違ひ日曜日。

俺は前もって予約していた
とあるホテルに来ていた。

例の彼女……。

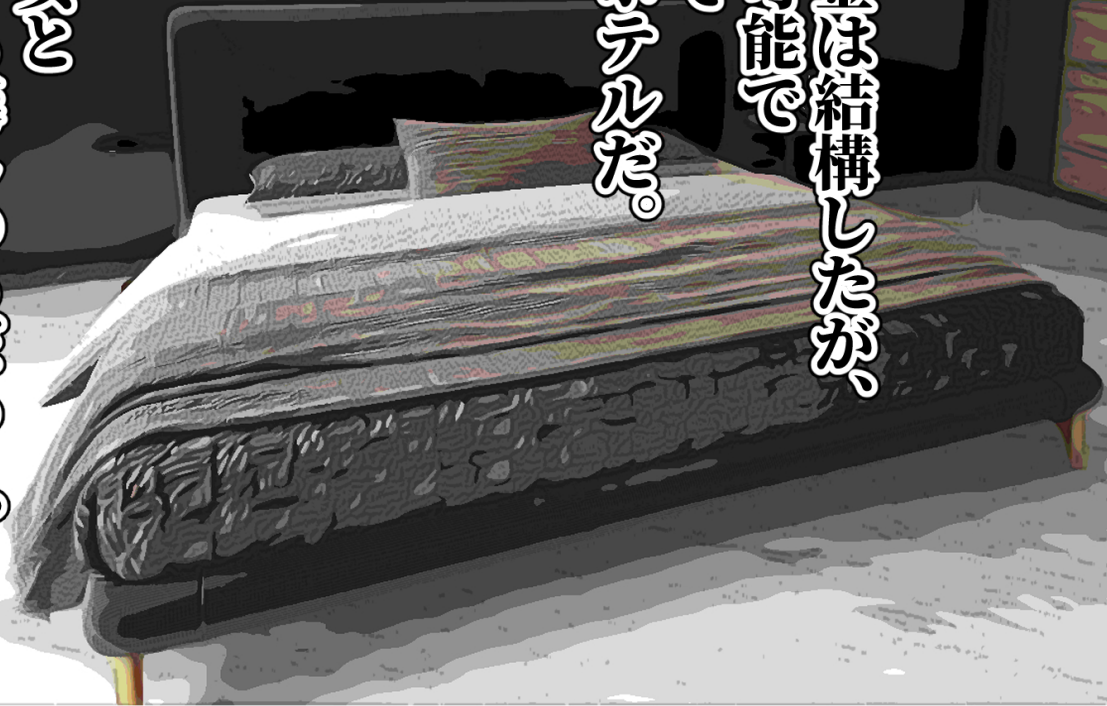
連絡先を交換して

今日一緒に遊ぶことになった。

ホテル探しにはかなり念を入れた。

オプション料金は結構したが、
汚れプレイが可能で
そこそこ綺麗で
雰囲気のあるホテルだ。

ここでなら彼女と
スカトロプレイも楽しめるだろう。





と、そろそろ待ち合わせの時間だ。

彼女にはホテルの
部屋番号を伝えてある。

交換した連絡先からは
「もうそろそろ着きます」

と、メッセージが飛ばされてきている。

「お、お待たせしましたっ」

時間通り、彼女がやってきた。



「いや、全然待ってないよ」

とお決まりの返事をする。

「じ、じゃあ早速始めましょうか♡」

と、彼女はそわそわした態度だ。



「言われた通り、
いっぱい食べてきました……♡」

彼女は後ろを向くと
そのままスカートをたくし上げる。

肉付きのいいお尻が露わになる…。

无ワッ...

しゅんっ♡

「どう…ですか？」

パンツを履いたまま

漏らすトコが見たいんですよ♡」

「ああ……もうダメですっ……♡」

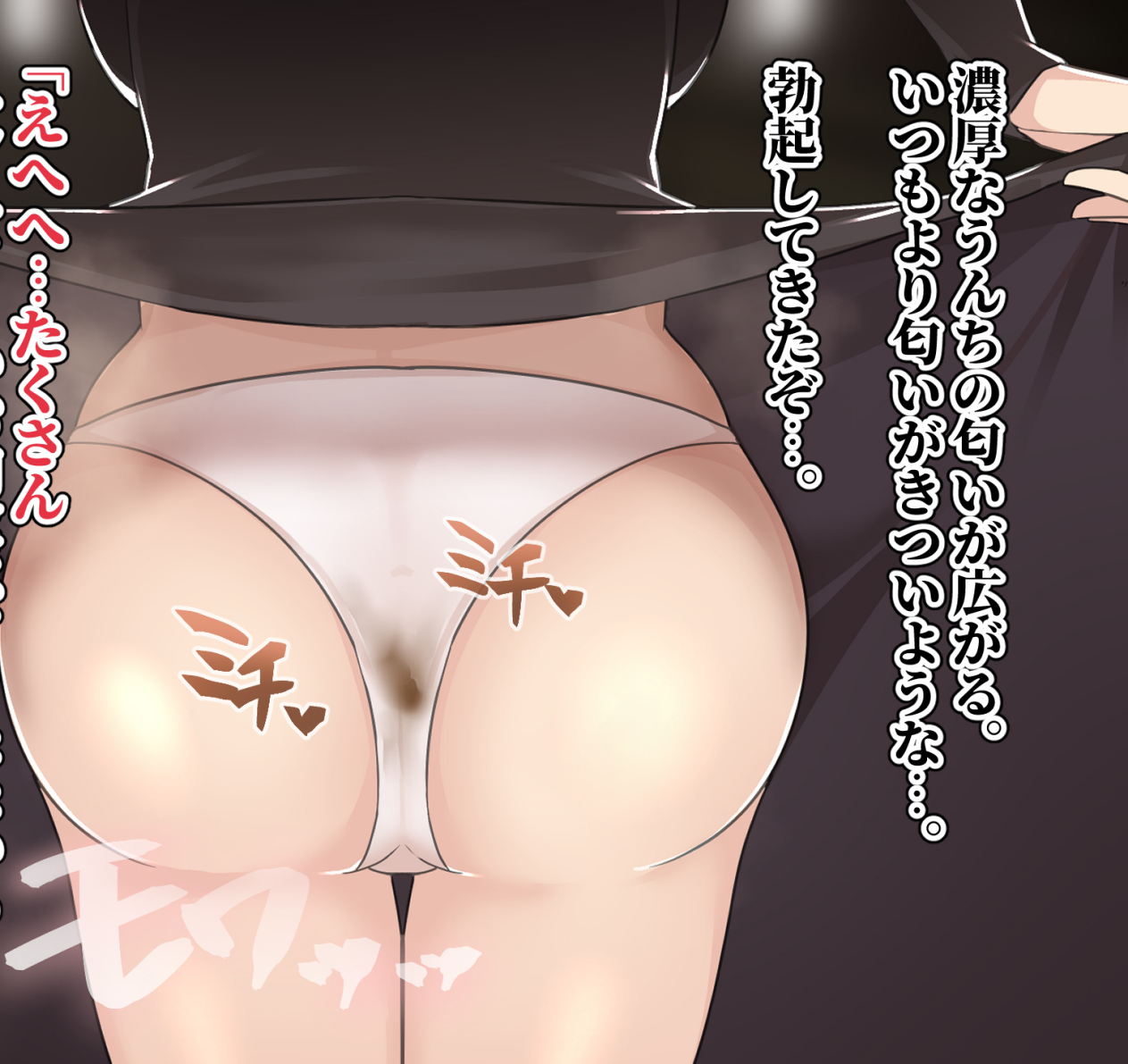
ああ……っ♡

括約筋が少し緩んだのか
下品な音とともに
パンツに茶色い染みが広がる……。



濃厚なうんちの匂いが広がる。
いつもより匂いがきついのよな。。。

勃起してきたぞ。。。



「えへへ…たぐさん
ニンニクとかお肉食べてきたたから

自分でもわかるくらい
臭いのが出ちゃってますね…♡」

次第にウン汁が太ももを伝い始める。

すごく背徳的な光景だ……。

ハア…

ハア…

ビチャ… ドク…

「結構出ました…♡
パンツの中…お尻、
柔らかいうんちが温かいです…♡」

「それじゃ、これをこうして……と♡」

彼女ほうんちの詰まった
パンツを脱ぎ下ろす。



「今度はこのうんちを使って
気持ちいいこと、しましょうね……♡」

「ほっかほかの出したてうんちです♡
パンツの布越しに
熱や感触が伝わってきます…♡」

はぁい

はぁい

モ…モ…♡

彼女の手の上で、パンツに乗った
うんちが凄い匂いを放っている。

これからこれに包まれると思いついて
興奮が美感となって湧き上がる…。

脱糞が趣味でも
うんちを手に乗せることは
あまりなかつたのだから。

息を荒くして
彼女も心拍数が高まってるが
伝わってくるようだ……。



「そ、それじゃあ横になってもらって…

さっきからガチガチで苦しそうな
おちんちん、出してあげましょうね……」

言われた通り横になり、
怒張したチンポを解放する。

しゅん…

「わっ……♡
ドクドク脈打ってる……♡」

わっ

ドクドク

ドクドク

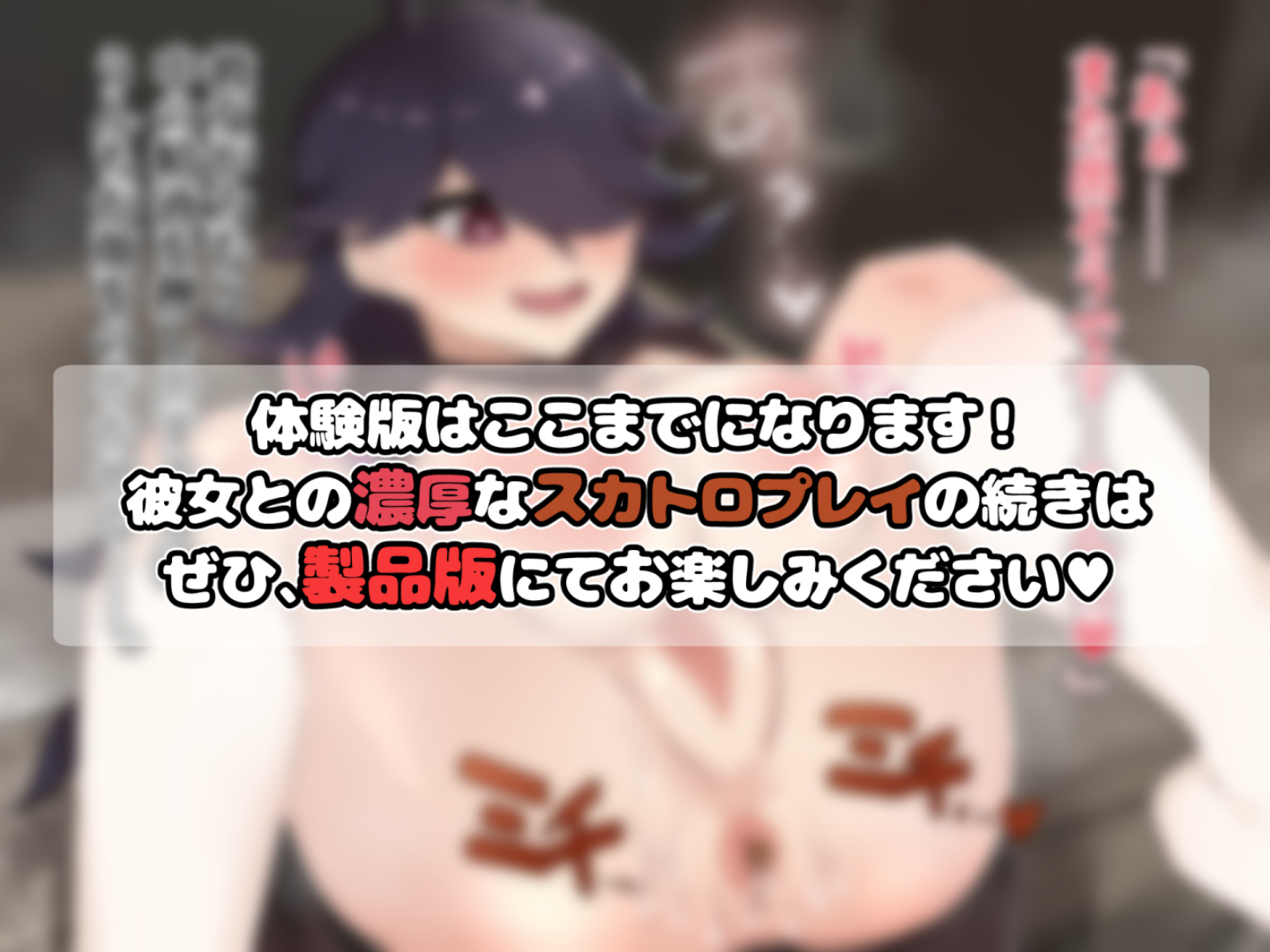
「今日ののために、ザーメン
溜めてくれたんですよね……♡
フフツ……♡」

ホカ〜

「このオナホ、中がちよつと透けてるんですねえ…♡」

このオナホおまんこに私のうんちとローションを入れて…」

ホカ〜



体験版はここまでになります！
彼女との濃厚なスカトロプレイの続きは
ぜひ、製品版にてお楽しみください♡